武蔵野幕屋創立34周年記念聖書講筵　祈祷会

父の御国
――ルカ伝第12章1～34節――

１９７４年９月22日
小池辰雄

キリスト然り　南無の世界　御霊の世界　自然の姿　生命的一体　父の御意を求めよ　御国、御意、御霊は同じこと　御国を賜う　祈り

【ルカ12・1～34】

1その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合うばかりなり。イエスまず弟子たちに言い出で給う『なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽善なり。2蔽われたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬものはなし。3この故に汝らが暗きにて言うことは、明るきにて聞こえ、部屋の内にて耳によりて語りしことは、屋の上にて宣べらるべし。4我が友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何をも為し得ぬ者どもを懼るな。5懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ。6五羽の雀は二銭にて売るにあらずや、然るにその一羽だに神の前に忘れらるる事なし。7汝らの頭の髪までもみな数えらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。8われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に我を言いあらわす者を、人の子もまた神の使たちの前にて言いあらわさん。9されど人の前にて我を否む者は、神の使たちの前にて否まれん。10凡そ言をもて人の子に逆らう者は赦されん。然れど聖霊を瀆すものは赦されじ。11人なんじらを会堂、或は司、あるいは権威ある者の前に引きゆかん時、いかに何を答え、または何を言わんと思い煩うな。12聖霊そのとき言うべきことを教え給わん』……

22また弟子たちに言い給う『この故にわれ汝らに告ぐ、何を食わんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。23生命は糧にまさり、体は衣に勝るなり。24鴉を思い見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之を養いたもう、汝ら鳥に優るること幾許ぞや。25汝らの中たれか思い煩いて、身の長一尺を加え得んや。26されば最小さき事すら能わぬに、何ぞ他のことを思い煩うか。27百合を思い見よ、紡がず、織らざるなり。されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、其の服装この花の一

つにも及かざりき。28今日ありて、明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神は斯く装い給えば、況て汝らをや、ああ信仰うすき者よ、29なんじら何を食い何を飲まんと求むな、また心を動かすな。30是みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝らの父は、此等の物のなんじらに必要なるを知り給えばなり。31ただ父の御国を求めよ。さらば此等の物は、なんじらに加えらるべし。32懼るな、小さき群よ、なんじらに御国を賜うことは、汝らの父の御意なり。33汝らの所有を売りて施済をなせ。己がために旧びぬ財布をつくり、尽きぬ財宝を天に貯えよ。かしこは盗人も近づかず、虫も壊らぬなり、34汝らの財宝のある所には、汝らの心もあるべし。

●キリスト然り

ルカ伝12章1節に、

1その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合うばかりなり。

とある。大変な人ですね。何千人ということでしょう。

イエスまず弟子たちに言い出で給う『なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽善なり。

キリストは、「パリサイ人のパンだね」とは、そのパリサイ人の精神が偽善であると言う。いかにもいわゆるもったいぶった、もってまわったような道徳的、宗教的な在り方が、キリストにはそれはもう偽善だと言うんです。

4我が友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何をも為し得ぬ者どもを懼るな。5懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ。

と。これは神の権威、御霊の権威です。キリストはこの権威を持っていらっしゃる。祭司や学者は、この権威がない。偽善の、うわべの、また形式的な宗教性、道徳性ということです。

6五羽の雀は二銭にて売るにあらずや、然るにその一羽だに神の前に忘れらるる事なし。

神さまがいかに万物を一羽の雀すらも顧みておられるか。こういうキリストの言葉は非常にそれ自身が権威を持っている。イエスという方はいわゆる宇宙論なんかなさらないけれども、すべて造られたるもの、被造物、万物は神の聖手のうちにある。御意のうちにあると言う。徹底的にそういうことですね。

7汝らの頭の髪までもみな数えらる。

こんなことを言える人はちょっとないわけです。頭の髪までも全部数えられていると。

懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。8われ汝らに告ぐ、凡そ人の前

に我を言いあらわす者を、人の子もまた神の使たちの前にて言いあらわさん。
9されど人の前にて我を否む者は、神の使たちの前にて否まれん。

「キリスト然(しか)り」

と生きている人は、キリストを拒むわけにいかん。私たちは、キリストを然りとして、御霊に在る者は生きるわけです。これはキリストを拒まない姿勢です。キリストをもし私たちが拒むと、あるいは三人称的な角度で無関心でいると、必ず力がなくなる。不安が来る。疑いが来る。

「どうしようか、こうしようか」

なんてなことになる。もし、神に対して人の前にて「否(いな)」と言う者は、また神さまの使いたちの前でも否まれるという。

「主さま！」という響きは、「主さま！」という祈りは直ちに「然り！」という祈りです。

「主さま、アーメン！　主さま、然り、アーメン！」

と。キリストは、

「父よ、然り、アーメン」

です。私たちは、

「主よ、然り、アーメン」

です。これは私がいつも言っているとおり、主キリストと父とは離すわけにいかん。どっちを呼ぼうが同じです。「南無阿弥陀仏」とか、「南無妙法蓮華経」とか言いますけれども、私たちは

「主キリスト然り」

と言う。もう祈れないことはひとつもないんです。祈ってくださいと言われたら、

「主さま、然り、アーメン」

でお終い。本当にどん底から自分を投げ出して祈ってごらんなさい。直ちにもう御霊の世界ですから。

●南無の世界

「南無阿弥陀仏」

の「南無」とは、帰命(きみょう)、帰一(きいつ)すること、それに帰ること。帰って一つになることが「南無」です。「阿弥陀」「アミッター」は「無量寿無量光」です。無量の命、永遠の生命、永遠の光。「仏」は「ブッダ」「覚者」。キリストは目覚めたる者、覚者、悟れる者です。

「汝ら、目を覚ましおれ」

という。キリストは覚者ですから。「南無阿弥陀仏」は、私たちもそういう「南無阿弥陀仏」を言って一向差し支えない。

「無量寿無量光の覚者キリストよ、あなたに帰り行きます。あなたと一つになりま

す」

というのが「南無阿弥陀仏」なんだから。「南無阿弥陀仏」という祈りはなにも仏教徒にかぎらない。キリスト教徒がそう祈れる。まだ誰もそんなことを言わんでしょ、「南無阿弥陀仏」とは。私はとてもうれしくなってしまった。浄土真宗と同じです。「南無阿弥陀仏」と言って、仏さんを祈っているんじゃなくて、キリストを祈っているんだから、困ったもんです。

「主さま、然り、アーメン」

と。本当に沈黙して、そして、グーッと自分を投げ入れて、十字架のキリストから復活・聖霊の天界のキリストに瞑想しながら、「主さま、然り、アーメン」と言ってごらんよ。もう、完全に聖霊の世界ですから。ウワーッと生命が来てしまう。何とも言えない、もう何がどうなっても大丈夫なところに来てしまう。

それはおよそパリサイと違うんです。自分の側の

「道徳だ、宗教だ、信仰だ」

なんて言っているのと違う。こっち側の実存を一生懸命で気にしているのが、そしてそれを何ものかと思っているのが、パリサイです。イエスはそんなものは全然、問題にしない。神の懐の中に入ってしまっているから。もう、充満というか、キリストは即、神である。

「我と父とは一つなり」

というわけです。

「我とキリストとは一つなり」

という、この「南無」の世界、帰一する世界です。その世界に入ったら、

「わがうちにあるものを汝に与う」

と言えるんです。

●御霊の世界

あなた方、本当に困っている人、病める人に祈って按手してやりなさい。Hさんあたりは患者にその角度でもって手を按いてやればいい。まぁ、女の方だから手を按かれると、向こうはちょっと困るのかも知れないが。けれども、ちょっと離しておけばいい。一寸ぐらい離したって一向差し支えない。ビーッと響きますから。それで患者に作用します。

ジャンヌダルクが素晴らしい女性だと言うけれども、皆さん、ここにいらっしゃる女性もジャンヌダルク以上の世界に入れるんですよ。本当です。この御霊の世界に来たら、これを毎日とにかく祈りぬくことです。

「祈りぬく」ということは、なにも時間をかけてということではない。存在そのもので祈りぬいていく。そうしたら、もう知らないまに、何か知らんけれども、存在そのものに本当の常燃といいますか――原始力、原始核です――原始力的存在になる。もう勝負ありです。どうぞ、あなた方の今の若さからそれをやってごらんなさい。一年、三年、五年、十年と。

私は今の歳になってやっと気がついてね、あなた方がうらやましいわけだ。けれども、これは歳に関係ないから、年齢の、あるいは年月の長短に関係ないから、

「後なる者は先に」

ということだ。

そういう角度からこの福音書を読むと、楽しくてしょうがない。福音書は、キリストが呻いていらっしゃる。そういう角度から、あなた方、これを読んでごらんよ。私は今日、祈祷会でどこをやろうかなんて何にも考えてない。パッとさっき開いたところにしたんです。そして、こういうふうになった。あなた方も日曜日は何もあわてることはない（笑）。

10凡そ言をもて人の子に逆らう者は赦されん。然れど聖霊を瀆すものは赦されじ。

と。これはキリストの言葉ですよ。

「人の子」

というのはご自分のことです。自分にいくら言葉で逆らったって、まぁ、そんなものは赦してやる。けれども、聖霊を瀆すものは赦されないと言う。パリサイ人はこの聖霊を瀆している。偽善というやつは聖霊に逆らっている。偽善、傲慢は――観念信仰は逆らってはいないけれども――しかし、どうにもならないな。これは聖霊と関わりない。

11人なんじらを会堂、或は司、あるいは権威ある者の前に引きゆかん時、いかに何を答え、または何を言わんと思い煩うな。12聖霊そのとき言うべきことを教え給わん』

大事なのは、聖書をよく身読し、身体で読んで、祈りをもって読んで、御霊の光で読んでいることが大事です。もちろん、註解書で勉強もしてくださいよ。あなた方一人びとり、

「私はヨハネ伝をやります」

とか、

「私はルカ伝をやります」

とか、大いにやってください。勉強もしてください。けれども、勉強や研究が何かではないと申しあげているとおりです。勉強や単なる研究では、権威は出てこない。権威はこの御霊が与える。

今、そういう前段のところを私はなぜ読んだかというと、この聖霊におけるところの権威、

「聖霊に逆らうものは赦されない」

と言って、いかにキリストが聖霊を重視していらっしゃったか。あまりキリストは聖霊のことを言われないけれども、ここではっきりそのことを言ってらっしゃるわけです。

●自然の姿

それで、さっきの22節のところに行きます。

22また弟子たちに言い給う『この故にわれ汝らに告ぐ、何を食わんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。23生命は糧にまさり、体は衣に勝るなり。24鴉を思い見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之を養いたもう、汝ら鳥に優るること幾許ぞや。25汝らの中たれか思い煩いて、身の長一尺を加え得んや。26されば最小さき事すら能わぬに、何ぞ他のことを思い煩うか。27百合を思い見よ、紡がず、織らざるなり。されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、其の服装この花の一つにも及かざりき。28今日ありて、明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神は斯く装い給えば、況て汝らをや、ああ信仰うすき者よ、29なんじら何を食い何を飲まんと求むな、また心を動かすな。30是みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝らの父は、此等の物のなんじらに必要なるを知り給えばなり。31ただ父の御国を求めよ。さらば此等の物は、なんじらに加えらるべし。32懼るな、小さき群よ、なんじらに御国を賜うことは、汝らの父の御意なり。33汝らの所有を売りて施済をなせ。己がために旧びぬ財布をつくり、尽きぬ財宝を天に貯えよ。かしこは盗人も近づかず、虫も壊らぬなり、34汝らの財宝のある所には、汝らの心もあるべし。

と。有名なところですね。マタイ伝の山上の垂訓と同じだ。いちいち言わなくたっていい。

ロダンという彫刻家がいますね。あの人は何を見ていたか。あの人の彫刻がなぜ凄いかというと、人間にしろ自然にしろ、とにかく自然の姿を見ていた。写真もそうだよな。知らないまにパッと撮るのが本当の写真だ。真を写している。

「あ、今、写されるな」

なんて、こっちが構えたら、もうこれはちょっとパリサイになったりする（笑）。パリサイ写真はダメだよな。クラスの集合写真なんかひとつもおもしろくない。全部集めてしまって、校長さんが真ん中にいてね、あんな写真はひとつもおもしろくない。全く雛人形みたいだ。

本当の芸術家は、また本当の科学者でも、要するに、あるがままの姿を写す。ゲーテが正に詩の世界でそうでした。何か理念を、観念を、主義を、詩の中に織り込もうとは彼はしてない。『ヴィルヘルム・マイスター』は一体、何を言っているんですかと。一番いい小説は、

「何を言っているか」

なんて説明のできないのがいい小説だという。ということは、要するに、現実を最も芸術的に写しだしている。ゲーテのドラマはマクロコスモスを、大宇宙をそこに写しだして、小宇宙として展開している。ダンテはもの凄い構造で

「地獄篇、煉獄篇、天国篇」

を書きました。素晴らしい構造です。もの凄い建築家的な構造であるけれども、しかし、

そこに動いているところの現実は実に生き生きとした、やはり自然の姿なんです。そういった生き生きとした自然の姿です。

ロダンにしろ、あるいは他の偉大な画家にしろ、みなそうです。だから、抽象画なんてものはおよそダメですよ。いくら、ピカソが素晴らしいと言ったって、それは抽象におけるピカソの素晴らしさというものは評価できるでしょうけれども、やはり、もうその世界は過ぎてしまった。あれはちょっと精神分裂式だ。棟方志功なんていうのも自然の方だな。

●生命的一体

イエスこそ本当に現実を――人間の世界だったら「現実」でいい。自然の世界だったら「自然」――自然および現実を直視している。直視すると同時に、その一番奥を内観している。内側を観ている。ただ見るばかりではない。もうひとつ凄いのは、キリストは見ながら、生かしてしまう。相手を生かしてしまう、在らしめてしまう、救いあげてしまうような見かた、つかみ方、これが本当の在り方なんだ。キリストはそのようにして神の世界を観ておられる。ひとつのアネモネを見ても、

「ソロモンの栄華もこの一つの花にかなわんよ」

と。生命の世界だからね。人間の造ったものは生命がない。ところが、神さまの造った世界には生命がある。どんなに虫が食っていたって、これは生きている葉です。どんなに素晴らしくできても、造花は生きている花におよばない。

なぜ、私は今日、ここのところを皆さんと読むかというと、そういった自然、あるがままの本当の生き生きとした――「あるがまま」というのは神さまに在らしめられている世界だよ。神さまに在らしめられ、生かしめられているところの、

「一羽の雀もただでは落ちないぞ」

という――神の愛がかかっているところの事態を本当に見て、その生命と共感している世界です。その生命と共感している。見ているばっかりではない。ただ対象的に見たって、これは本当の見るではない。内観と言います。内側から観て、そして今度は共に感ずる。共感している。だから、生命的一体になっているわけです。自然と共に、自然と我とは生命が一つに連なっている。その痛みを痛んでいる。その喜びを喜んでいる。嵐をみれば嵐となり、雲を見れば雲となる。そういうような、何とも言えないようなものです。

ゲーテというやつはちょっとそういう角度の人間です。だから、彼の書いているものは限りないんです。千変万化で、しかも一貫した大きな大調和を持っている。ベートーヴェンの音楽がそうではないですか。

そういうような角度でキリストはこの大自然を見ている。

「蒔(ま)かず、紡がず」

なんて言って、いかにも怠け者を讃美しているようだが、そうじゃないですよ。

「神さまの生命がこんなに彼らを生かしているんだよ」
ということです。「蒔かず、何々せず」なんて言ったって、何もしてないということではなくて、
「神さまはこんなに彼らを生かして神の生命が貫流しているではないか。そこに神が見えないか」
ということです。人間は、何かを作ったり、衣食住のことをガタガタやっているけれども、ただするなと言うのではないけれども、それに囚われているんだ。完全に都会生活はそうだな。百貨店に囚われてしまっている。文明は行き過ぎてしまって、今度はいろんな意味で困ってしまった。キリストの言葉をもっとはやく尊重して、自然と生命を一つにして、本当の生命の法則に従って生きるような生き方をしていればよかった。日本なんか、もう一遍、農業を正しい意味において復活しなければ、正直危ないですよね。
「イエスの言葉は、古い時代なら通ずるだろうけれども、今は通じない」
ではないですよ。大法則の世界、生命の世界をキリストはこういうように言ってらっしゃる。
「神と生命を一つにせよ、自然と生命を一つにせよ、我々は自然と遊離して在りえるか」
と。花を見れば花となっていく。どうですか、それだけの気持を――魂の柔軟性といいますか――もの凄い弾力性を持ってますか。御霊の世界にくると、それができるんです。
御霊の世界で万葉を読めば、普通のいい加減な万葉学者よりかはるかに本質を掴(つか)んでしまう。私は電車の中で「百人一首」を読んでいる。楽しいよ。なにもお正月にやるために準備しているのではないけれども（笑）。彼らの心境を味わう。それは百人一首よりも万葉集の方がいい。
それから、一茶です。私は一茶の俳句を読んで、こんなに一茶とは幅のある人かと思って驚いた。凄いね、やっぱり。一茶は、どん底の生活をしているから、本当の現実をつかまえて、それと共感しながら歌っている。作られた俳句ではないですよ。ほとばしっている。告白ですよ。歌の会だとか何とか、あんなもので題を出されて作ったのは、みんなパリサイ俳句だ。そういうのではダメです。ああいうのは賛成できない。やはり、すべて体験から発しないものは、みんないつわりです。本式のものはみんなそういうように裸になってぶつかっている。ロダンなんていうやつは、パッとキャッチして、そいつをグーッと描きだすでしょ。だからもの凄い。とにかく、作られざるもの、ほとばしって生まれ出たもの、そういうものに対する新鮮な感覚が大事です。

●父の御意を求めよ

「なんじら何を食い、何を飲まんと求むな」

とあるでしょ。こないだも、百歳以上の人のものをちょっと読んだら、お豆腐と納豆は非

常にいいそうだね。あなた方、なにも高いものを買う必要はないよ。お豆腐と納豆とめざしを食べていればいい。あの納豆には非常にいろんなものがあるそうだな。ものが高くなってどうのこうのとあわてることないですよ。いよいよ耐乏生活でもってちゃんといける。何がなくても。まぁ、私はいろんなものを持っていて申し訳ないですけれども、こんなものはどうにでもなりますから。

そういう、

「**有れども無きが如し。無けれども有るが如し**」

という、パウロが言った境地がみなそれです。なにしろ、魂はこだわったらダメになる。

けしからん連中が小さい子どもに向かって、

「自主的だ」

とか言っているが、全く何をぬかすかと思う。本当の自主というものはそんなものではない。神さまの前に平伏すまでは、「自主」なんて言ってはいかん。神さまが私たちの中で自主となってくださるときに、本当の自主なんです。そうでないかぎり、手離しの自主なんてものはわがまま勝手で、そんなものは自我です。

そういうことで、ここを読んでいると、非常に楽しいわけです。神さまの生きている世界をこんなにキリストが、

「神さまが花の中で生きている。鳥の中で生きている」

と言う。鳥が一羽落ちることは神さまが落ちることになるわけだ。それだけ凄い憐れみをもって小さき存在を顧みている。詩篇の中にもあったでしょ、

「**鳴く子鳥を養う**」

とか何とか。あれは私は大好きな句だ。

31 **ただ父の御国(みくに)を求めよ。さらばこれらの物は、なんじらに加えらるべし。**
32 **懼(おそ)るな小さき群よ、なんじらに御国を賜うことは、汝らの父の御意(みこころ)なり。**

「**ただ父の御国を求めよ**」

という。この言葉のもうひとつ奥を言います。

「ただ父の御意を求めよ」

です。父の御意を求めていて、これを生きていたのがキリストです。

「**汝の御意(みこころ)を成させたまえ**」

と、いつもキリストは父の御意を求めていた。

「**求めよ、さらば与えられん**」

というのは、

「父の御意を求めてみろ。そうしたらば、その御意がそこに通じてくるぞ。自分を提身してみろ。そうしたらば、御霊が通じてくるぞ」

ということです。御意はもちろん霊を持った御意ですから、神の霊と同時に、御霊と同時

に御意が通じてくる。父は霊でしょ、霊なる父でしょ。

「神は霊にして、神は父なり」

と、キリストがヨハネ伝4章で言っているとおりです。霊なる神、霊なる父の御意はもちろん霊的な魂、御霊において感ぜられてくるところのものですから。御国を求めるということは、御霊を求める、御意を求めると同じことです。いいですね。御霊、御意を求めること。

求めるとは何か。自分を立てていたってダメですよ、自分をその中に投げ込んでいかなければ。求めるときには、手だの足だのではダメです。全身でもってその中に入っていく。だから、祈りは全身を投ずることだと言ったでしょ。そうしたらば、父の御意の体現者、体(からだ)で現す人になってくる。体で現す。そんな動き方になってくる。そうすると、

「何か知らんけれども、あの人はちょっと外からは動かせない。けれども、ひとつもあれは我(が)ではない」

ということがだんだん感ぜられるというわけです。自分が投げ捨てられているような人だからね。

●御国、御意、御霊は同じこと

32 **懼(おそ)るな、小さき群よ、なんじらに御国(みくに)を賜うことは、汝らの父の御意(みこころ)なり。**

はい。ここに「御国」と「御意」という言葉がちゃんと出ているでしょうが。父の御意が行ぜられるところが即ち御国なんです。父の御意の支配しているところが御国です。父の御意は愛の心ですからね。神の愛が支配しているところが天国、御国、パラダイスということです。

あの十字架の片一方の盗賊が、

「もう私はお終いだけれども、せめても、覚えてください」

と言ったら、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

とキリストが仰った。何というひとでしょうね、キリストというひとは。だから、そのように自分を投げ出して、

「主さま、あなたです。然り、アーメン！」

とやっていると、そこに御国が来るんです。御意がやって来る。キリストを、神さまを然りと言っているところには、そこには御意がやって来る。

「よしっ、行くぞ」

と。左顧右眄することはない。突撃する。そうしたら、同時に力が来ますから。この御国、御意、御霊は全部同じことです。そこには本当にキリストの力が、愛の力が働いてくる。光が浸透してくる。

33 **汝らの所有(もちもの)を売りて施済(ほどこし)をなせ。己がために旧(ふる)びぬ財布(さいふ)をつくり、尽きぬ財宝(たから)を天に貯(たくわ)えよ。かしこは盗人(ぬすびと)も近づかず、虫も壊(やぶ)らぬなり、**

「財宝を天に積む」

とは、私たちの地上のいわゆる財宝はどんなに貯えても、次の世界に往くときは、みんな裸だよ。私はこの聖書だけは持っていきたいけれども、これも持っていけない。これも置いていかなくてはならない。だから、聖書の御言が全部、魂の中に化体(かたい)して、

「もうこの聖書は要りませんよ。もう化体しましたから。聖書はわが魂の中に溶け込んでいるから、聖書も要らん」

という人にならなくては。語学を勉強して、

「字引が要らん」

と言ったら、大したもんだよ。なかなかそこまでは行かない。

「文法の本は要らん。動詞の三段変化は要らん」

くらいのところまでは行くけれども。それくらいのことは言えるけれども、「字引は要らん」というところになかなか行かない。ところが、

「聖書はもういいです。聖書は、私自身が生き聖書になりました」

と。皆さんは生き聖書となっていく。なかには牧師さんで聖書をよく暗記している人があるね。どこの何章何節がどうだと。非常に記憶力がいい。まぁ、ただ暗記だけがいいわけではないけれども。とにかく、聖書が私たちの中に生きている。私は記憶力が非常にわるい方だけれども、しかし、大事な聖句くらいは大体入っているから、聖書なしで話をしろと言われたら、多分できるだろうと思いますけれども。どうぞ、皆さんは、

「私はとにかくヨハネ伝なら――ルカ伝なら、マルコ伝なら、マタイ伝なら――任せてくれ」

と言って、毎日毎日、これを読み返し読み返しして、もうすーっと頁のあの辺にこういう字があったなんて浮かんでくるようなことにまでならなくてはね。夢の中で聖書が浮かんでくるようになったら、いいですよ、あなた方。

●御国を賜う

私たちにとって、この「財宝」とは何か。これは御霊です。御霊は、聖霊は何ものとも代えられない。今、私ははっきりそう言います。私から聖霊をとったら、もうこれはもぬけのからです。聖霊は何ものとも代えられない。どうしてこんなことになってしまったかね、私は。しょっちゅう聖霊が充満しているような男でもないくせに、はっきりそうなんです。けれども、気がつけば、

「主さま！」

と言えば、直ちにその世界に入れる。もうそういうように、ある意味において、豹変して

いるね、本質的に。だから、今までの普通の信仰なんてのとは違う。というのは、本当に自信ならざる自信がある。何と言われようと、びくともしないものがあるから。そうですよ。

「32 **懼(おそ)るな、小さき群よ、なんじらに御国(みくに)を賜うことは、汝らの父の御意(みこころ)なり。**」

と。聖霊のあるところは、神さまが御国をくださる。既に御国は来ているんです。だから、

「やがて終末の御国もお前たちにやる。終末の御国の民にしてやるぞ」

と。

「御国を賜う」

というのは、

「お前たちは御国の民であるぞ」

ということです。人間の外側の大小、多寡、そんなものは問題じゃないよ。大事なのは質です。私はもうこれで、集会を開いて34年になる。死に至るまで集会をおそらく続けるつもりです。おそらくではない。はっきり続けると言ってもいい。ただし、あなた方が集会を休んだりすると集会を解散して、それから新しいのを募集するかもしれない。その時は、

「悪かった」

と言って、またやって来ればいいけれどもね（笑）。

神の国はそのようにして、御霊が有るか無いかではっきりする。

「御霊の無い者はキリスト者にあらず」

とパウロが言っているではないですか。本当のキリスト者をつくるためには、それが幾人だっていい。そうしたら、この本ものが――

「本もの」

というのはキリストと一緒になければ本ものではないよ――本ものであるなら、必ず人を救っていくはずです。人を救っていかないならば、それは本ものではない。ただ安住しているのでは。本ものは必ず人を助けて救っていきます。だから、必ず神の国は伸びていきます。あなた方はもう30、40、50歳になったら、グングン神さまに使われるよ。そして、知らないまに、

「ああ、武蔵野集会はあんなに小さかったけれども、こんなに大きくなってしまった」

と――数を言うのではないけれども――そういうようになっていきます。もう、生き甲斐がある。どうぞ、そういうようにして、スクラムを組んで行ってください。エクレシアというのはキリストの体だから、決してただ個ではない。相助けて行く。とにかく、そういうことで、

「32 **懼(おそ)るな、小さき群よ、なんじらに御国(みくに)を賜うことは、汝らの父の御意(みこころ)なり。**」

と。しかもまた、

「汝らを通して御国はどんどん展開していくぞ」

と、もうひとつ先まで読みたいわけです。書いてないけれども。汝らを通して御国は展開していく。

「御国を賜った。お終い」

なんてものではない。

●祈り

祈ります。主イエス・キリストさま。１９７４年９月22日、僕（しもべ）にとり忘れられないこの日、今から何十年も前に召された僕の兄が天上においてあなたのおん平安をいただき進んでいることを感謝いたします。僕の家族は大方向こう側に往きましたが、しかし、天地相応え、

「アブラハム、イサク、ヤコブの神、今もなお活けるものの神」

と、あなたは仰いましたが、天界にはあなたの御国を形成しているところの無数の群がここかしこにあると信じております。どうぞ、あなたの偉大なる御国を待って、掛け替えのないこの地上の生涯をこれから本当にいよいよ兄弟姉妹たちと相たずさえて、この御国のために私たちもまた全生涯を燃やしに燃やしていくことができますように願い奉ります。

この34年という数は大したことはございませんが、しかし、ここに受けたところのあなたの恵みに平伏して感謝し、またいよいよ、主さま、これからあなたの御意の成らんために、僕は本当にこれからがまた大事な生涯と思っております。どうぞ、主さま、十全に鍛えまたおん導きくださらんことを切に願い奉ります。

兄弟姉妹たちと共にいよいよ御国の子ららしく、また本当に一騎当千の士として、サタンの勢力に対して、パウロが

「汝ら、召されたる者よ、雄々しく戦いを戦え」

と言いましたが、本当にそのようにして、悪と戦い、また愛のどん底をもって担い上げていくところの、この聖霊の実力をいよいよ加持給わんことを切に願い奉ります。

この夏学びましたように、ペテロは主さまと一緒にいたときは、躓いたり転んだりしましたが、しかし、聖霊を賜ったペテロはあのごとく、ヨハネもまたヤコブもパウロもみなそのごとくでありましたが、私たちもまたこれをもって本当に勇躍せざるを得ません。いよいよ、主さま、生き甲斐のある人生を御名のゆえにいよいよ進ませしめ給わんことを願い奉ります。

また、そのようなことを知らない人たちに、いかにもしてこれを伝え、こんな喜びとこんな力とこんな光の世界があるかと、彼らが喜び勇むように、どうぞ、一人びとりを十全にお使いくださらんことを切に願い奉る。

今、心からの讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に捧げ奉る。アーメン。